



羅針盤

野村 有子
Yuko Nomura

野村皮膚科医院 院長



日常茶飯事

朝起きて、顔を洗って、化粧をして、朝食を食べて、出勤。仕事を頑張り、帰宅して、夕食を食べ、入浴して、就寝。誰にでもある日常生活。しかしながら、このような日常茶飯事の行動の中に、ニキビを増やしたり治りにくくしたりする要因が隠されている。一人一人の患者さんごとに、一つ一ついねいに悪化要因を見つけ出し、解決していく。そうしていくうちに、いくつかのパターンを見つけることができる。私にとってその一つが「マスクニキビ」である。

今から4、5年前にインフルエンザが流行した時期、受験生や学生さんたちが紙マスクを常用していることがあった。まさにマスクが日常茶飯事となっていた。ちょうどニキビがしやすいお年頃の患者さんたちがマスクをして来院し、「ちっともニキビが治らない!」と文句を言われた。マスクを外すと、その中は確かにニキビだらけである。数人立て続けにそのような症例に出会い、どうみてもマスクで蒸れてニキビが悪化している、と考えた。コロナ禍の今となっては当たり前となったことではあるが、それ以前の話である。その当時紙マスク以外の布マスクはほとんど販売されておらず、やむを得ず紙マスクの下にガーゼを入れるよう指導していた。

ある日、とってもかわいいお嬢さんが、紙マスクの下にアンパンマンマスク(ガーゼでできている)を着用して来院したことがあった。「アンパンマンマスクのまま

では恥ずかしいので……でも、紙マスクだけよりましです」と言われた。

その時に、ハッと思い立った。布マスクで、皮膚にやさしく、インフルエンザ対応で、そしておしゃれなマスクを何が何でもほしい!と、いくつかの試行錯誤を経て、3年前に完成したのが「ファブリックケアマスク」である。肌にあたる部分は、湿気を吸って乾きのよい素材として絹を選んだ。抗ウイルス加工を施した布を挟み、外側は綿もしくは麻を利用した。すべてを絹にすると高額になるからである。鼻の部分には柔らかいワイヤーを入れ、顎までしっかりおおうようなデザインとした。また、耳紐は耳が痛くならないように長さを調整できるようにした。

このマスクが、今年の春のマスク不足事態に大活躍した。洗って何度も使えることも功を奏した。そしてなんと、このマスクの機能とデザイン性が評価されて、今年の10月にグッドデザイン賞を受賞したのである(写真)。

日常茶飯事の中にも患者さんを治すためのヒントはたくさんあると思う。いやむしろ、日常茶飯事だからこそ、見落としてしまっていることがあると思う。日々「何で悪化してしまったのだろうか?」「何で治らないのだろうか?」と疑問符を頭の片隅に置いて診療することで、また新たな発見に出会えたらいいな、と思っている。